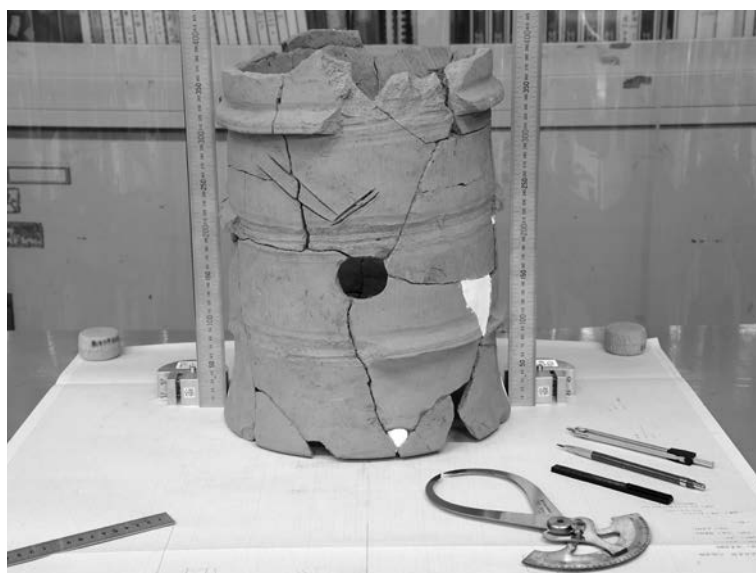


## 第2部 松橋前田遺跡出土資料報告 1



普通円筒埴輪と実測道具 2020/1/27

## 一 位置と環境

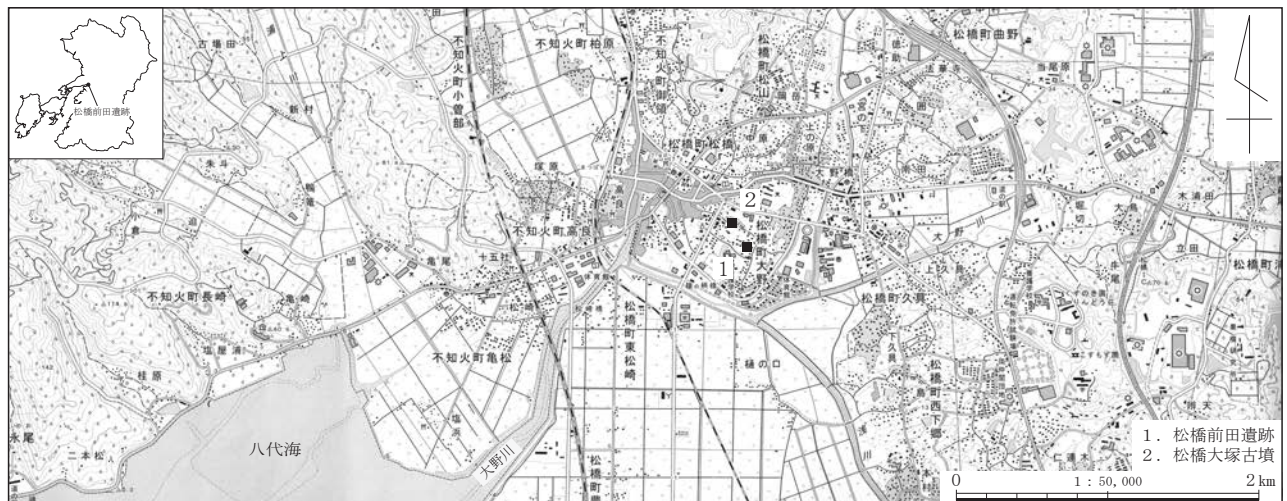
松橋前田遺跡は、熊本県宇城市松橋町松橋 333 番地にある古墳時代の遺跡である。本遺跡は、東西にのびる宇土半島の基部地域南半部、八代海を臨む標高 10 ～ 15 m 程の洪積台地上に位置している。近世以降の干拓事業によって現在は遺跡から海岸線まで 3 km 程の距離があるが、当時はより内陸にまで海が入り込んできていたため、この台地上から八代海を一望できたと考えられる（第 21 図）。

本遺跡の北東側には道德山、北側には岡岳があり、本遺跡は 3 つの小段丘面をそなえる台地上の中位段丘面に位置している。さらに、二級河川である大野川と浅川が遺跡の南側を流れており、これらの河川は八代海へと注いでいる。

さて、本遺跡の周辺は、多くの遺跡が営まれることで知られる。松橋前田遺跡の北西約 120 m には、松橋大塚古墳が所在している。松橋大塚古墳は、古墳時代中期に築造された前方後円墳である。2015 年発行の『松橋大塚古墳』（神川編 2015）によると、その規模は全長約 73 m、前方部幅約 27 m、後円部径約 43 m、後円部の高さ約 9 m とされている。また、本遺跡の南東側に隣接する大塚台地遺跡では、2016 年に熊本地震が発生した翌年の調査において、弥生時代の方形周溝墓と多数の粘土棺墓が密集する墓域が検出された。本遺跡の北約 300 m に位置する松橋大野貝塚では、2018 年度の調査で古墳時代中期の集落が検出され、本遺跡との関係が注視される（神川 2019）。さらに視野を広げ、宇土半島基部地域の南半部を概観すると、古墳時代前期に弁天山古墳や向野田古墳などの前方後円墳が築造された後、中期後半になって上述した松橋大塚古墳が築造されたことが分かる。後期になると国越古墳、仁王塚古墳、男塚古墳、女塚古墳などの前方後円墳が築造される。

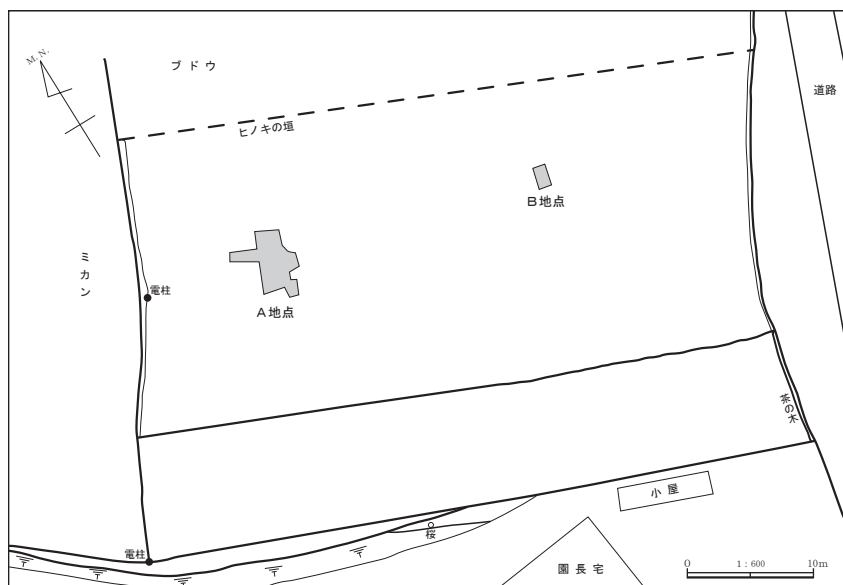
以上のように、本遺跡の周辺および宇土半島基部地域の南半部には、多くの前方後円墳や遺跡が存在しており、この地域の重要性を示していると考えられる。それは本遺跡が所在する宇土半島基部地域が、熊本平野と八代平野を繋ぐ地峡であり、北の有明海側と南の八代海側を結ぶ陸路の要衝であること、さらに宇土半島の南西側に位置する天草諸島と九州島内陸部とを結ぶ地域であることが関係するだろう。こうした遺跡の立地環境を考えることが、松橋前田遺跡の性格を考察する上でも大変重要になると考えられる。

（松本健）



第 21 図 松橋前田遺跡の位置

## 二 今回の報告に至る経緯



第 22 図 松橋前田遺跡 1965 年調査時のトレンチ配置図

**遺跡の発見** 本遺跡の発見は、みかん園の造成のために地権者が地面を掘削していたところ、偶然埴輪を見つけたことによる。その一報を受け、伊藤奎二氏や佐藤伸二氏によって発掘調査が行われた。本遺跡の調査は、当時の実測図に記された注記によれば、1965 年 3 月上旬に行われたことがわかる。調査では 2 カ所のトレンチが設定され、西側の長さ 5 m 程の不定形トレンチを A 地点、東側の 1 × 2 m 程度のトレンチを B 地点と

している（第 22 図）。両トレンチの間隔は約 22 m である。これらのうち、A 地点において多数の円筒埴輪や朝顔形埴輪、土師器が出土しており、埴輪は 23 個体分が出土したとされている。出土状況として、埴輪は多数が横倒しになっており、それらは雑然と出土したとされる。破片はそのほとんどが大きく、接合可能な状況であり、また土層にも乱れた形跡がないため、攪乱を受けていない遺跡であると判断されている。

**出土埴輪の胎土分析** 1999 年の塚原平古墳発掘調査団による『塚原平古墳』の中の「熊本県内の古墳、窯跡出土須恵器と埴輪の蛍光 X 線分析」と題される論文中（三辻・辻本・高木恭・中原 1999）において、松橋前田遺跡出土埴輪およびその周辺遺跡において出土した埴輪の胎土分析が行われている。そこでは、松橋前田遺跡出土埴輪の胎土と共通する特徴をもつ埴輪は松橋大塚古墳でのみ出土することが指摘されている。さらに松橋大塚古墳が前方後円墳であることに加え、この地域の首長墓であることを鑑みると、松橋前田遺跡は複数の製作地で製作された埴輪の集積所ではなく、1 カ所で製作された製品を集積し、松橋大塚古墳へ集中して供給していた遺跡であると評価されている。

**2009 年の整理作業と報告** 2009 年の竹中克繁・杉井健両氏による「松橋前田遺跡 A 地点出土埴輪の整理報告」（以下、2009 年報告とする）（竹中・杉井 2009）において、これまで未報告であった本遺跡出土埴輪の一部が報告された。そのなかで竹中氏は、松橋前田遺跡の埴輪と松橋大塚古墳の埴輪が非常によく似た特徴をもつ点や、松橋前田遺跡に窯場の痕跡がない点などに注目し、本遺跡の性格を製作地から埴輪が運搬され、集積されていた場所であったのではないかと推測した。また、松橋前田遺跡出土埴輪は、製作地から運搬中に破損したものや、欠陥がありつつも何らかの理由で運搬されてきたが古墳に並べられることなく当地で廃棄されたものであるとの見解を示した。

同じく 2009 年に、竹中氏は「窖窯焼成円筒埴輪生産の地域的様相—八代海沿岸の事例—」（竹中 2009）において、松橋大塚古墳および松橋前田遺跡出土埴輪の時期の検討を行っている。和<sup>な</sup>水<sup>み</sup>町<sup>せい</sup>清<sup>ぼる</sup>原古墳群で出土した円筒埴輪を編年の基準とし、これら基準資料と松橋大塚古墳および松橋前田遺跡出

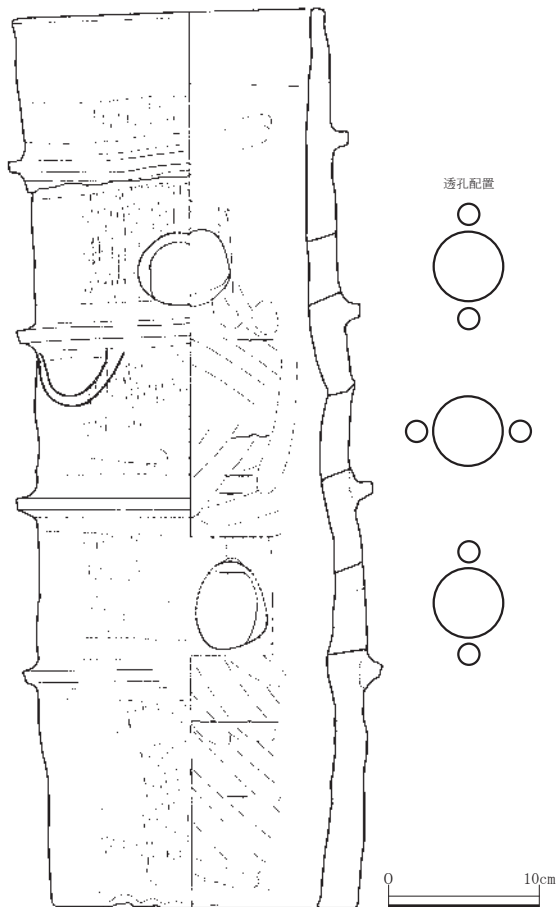
土埴輪の各特徴を対比させることで、松橋大塚古墳および松橋前田遺跡出土埴輪はTK 208～TK 23 型式段階の虚空蔵塚古墳に並行すると位置づけるのが妥当であるとしている。

以上これまでの研究で、松橋前田遺跡は松橋大塚古墳と密接な関係性をもち、さらには古墳築造過程の作業場所として重要な役割を担っていた遺跡であると考察されている。

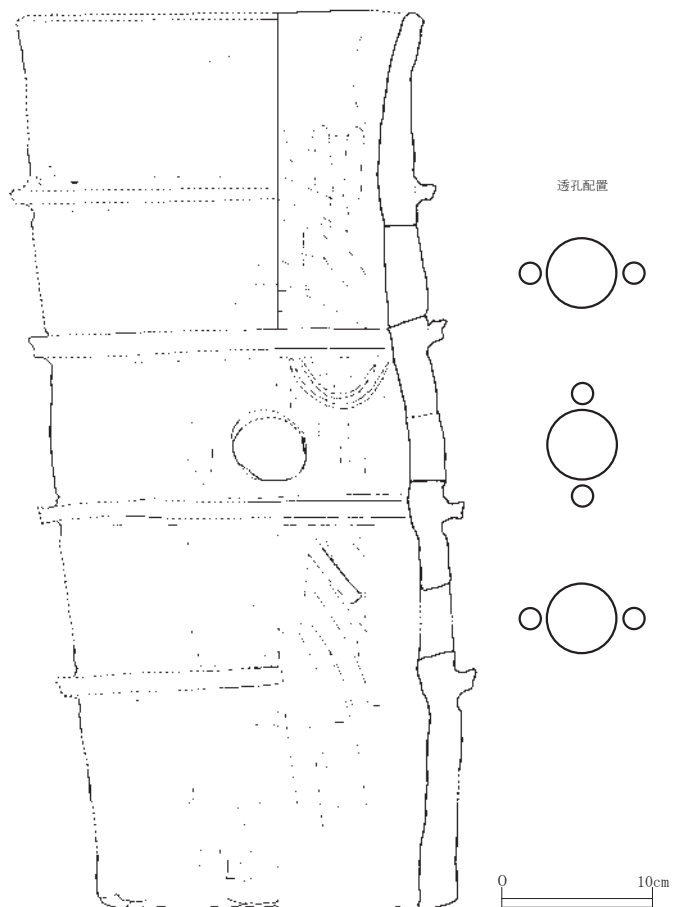
**今回の整理作業に至る経緯とその経過** 1965 年の調査の後、松橋前田遺跡出土埴輪の整理作業は、発掘調査担当者の伊藤奎二氏によって進められていた。その内容は報告書として公表されることはなかったが、伊藤氏が熊本大学に所属していたこともあり、埴輪は以後、熊本大学考古学研究室にて保管されてきた。1999 年には当時熊本大学の学生であった竹中克繁氏を中心に整理作業が再開され、上述のように、2009 年には埴輪 10 個体分の報告がなされた。しかし、すべての埴輪が報告されたわけではなく、未報告の破片が多数残されたままであった。そこで今回、考古学実習の一環として、その整理作業を再開することとした。

今回の整理作業では主に、埴輪の復元と図化を行った。今年度の発掘調査報告書の作業量との兼ね合いや、2016 年に発生した熊本地震の影響によって埴輪が破損してしまったことで、接合・復元作業は多くの困難を伴うものとなった。しかし、地道に作業を続けることで新たに 4 個体分の埴輪をここに報告することとなった。今回報告する埴輪は熊本大学に保管されている埴輪の一部であり、未報告となっている埴輪は、今も木箱に眠っている。今後も、未報告の埴輪の復元と図化を継続的にを行い、報告していきたい。

(石本)



第 23 図 松橋前田遺跡 A 地点出土普通円筒埴輪実測図  
(竹中・杉井 2009 より)



第 24 図 松橋大塚古墳出土普通円筒埴輪実測図  
(宮崎編 2015 より)

### 三 出土埴輪の整理報告

#### 1. 朝顔形円筒埴輪（第 29 図、図版 11 - 1・2）

1 は朝顔形円筒の第一口縁部及び肩部である。第二口縁は完全に剥落している。肩部には 2 方向に三角形の透孔が確認できる。肩部外面にはベンガラと思われる赤色顔料の塗布が見られる。頸部の突帯は断面三角形状で、ヨコナデにより貼り付けられている。外面には口縁部から肩部にかけて 3 条/cm のナナメハケののち軽度のヨコナデが施されている。口縁部内面にはヨコハケの上にヨコナデが見られるが、とくに口縁上部のヨコナデは明瞭である。内面のうち突帯に対応する位置にはユビオサエ痕、肩部にはヨコナデの上にユビナデが確認できる。なお、第一口縁の口唇部内面には第二口縁との接着を強固にするための刻みが施されている（第 26 図）。2009 年報告で図化されていた第二口縁部（第 25 図）が、その下端面にこの刻みと対応した凸状の痕跡をもつことから、これらは同一個体である可能性が高い。そのため、両者を合成して口縁部全体を復元した（第 29 図右上）。このように第一口縁の口唇部に刻みを施すといった例は、他の個体でも見受けられる（第 27・28 図）。

2 は底部から 5 段目の一部までが残存する個体である。口縁部が完全に欠損しているため器種の判定が難しい。しかし本遺跡や近接した松橋大塚古墳から出土した朝顔形円筒について、「円形以外に三角形の透孔もあり、肩部を含め、1 段につき 2 方向だけでなく、1 方向や 3 方向、4 方向にも配置



第 25 図 第 29 図－1 の第二口縁部下端面の接合痕



第 26 図 第 29 図－1 の第一口縁部口唇部内面の接合痕

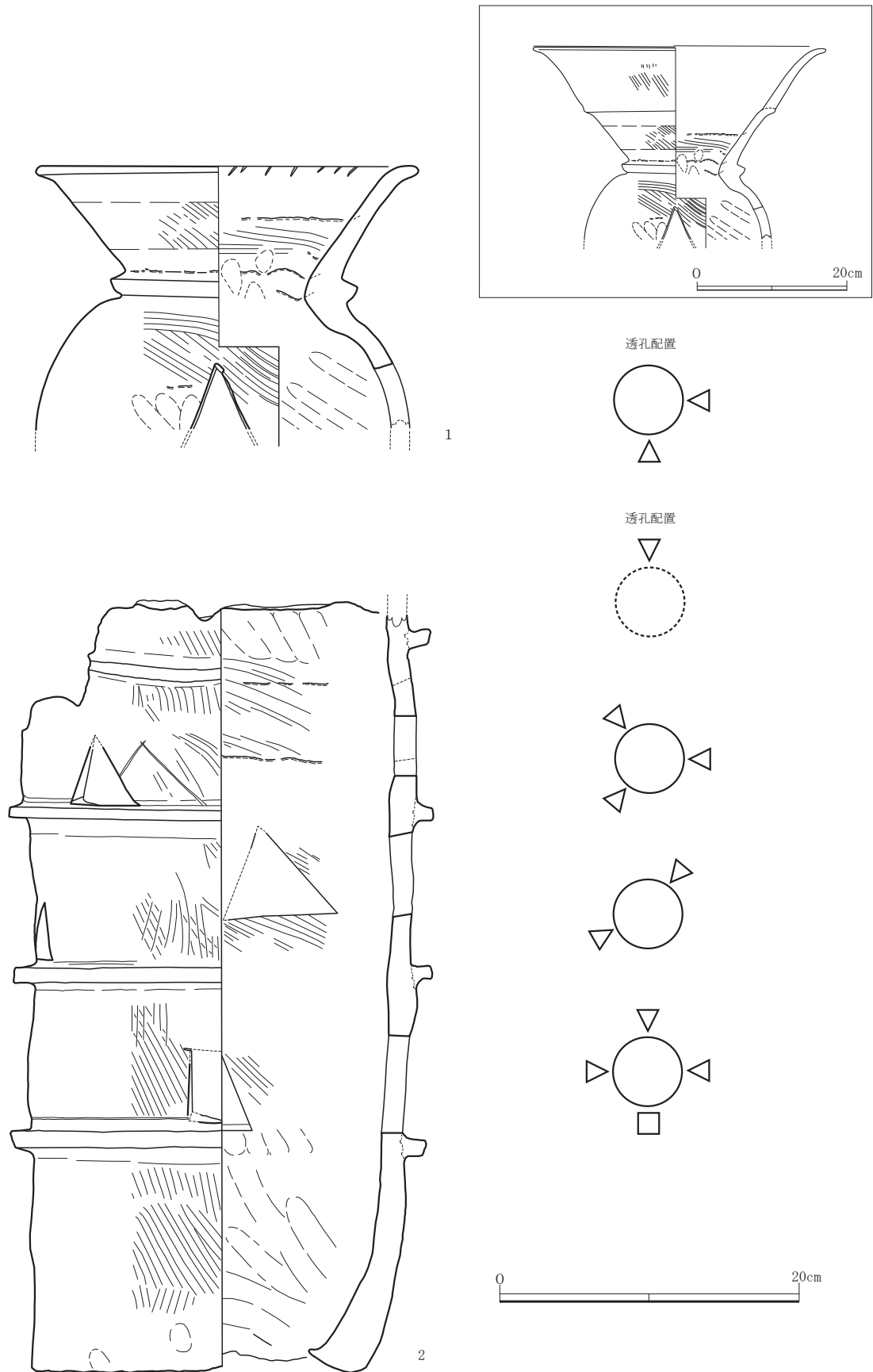


第 27 図 第一口縁部口唇部内面の接合痕（1）

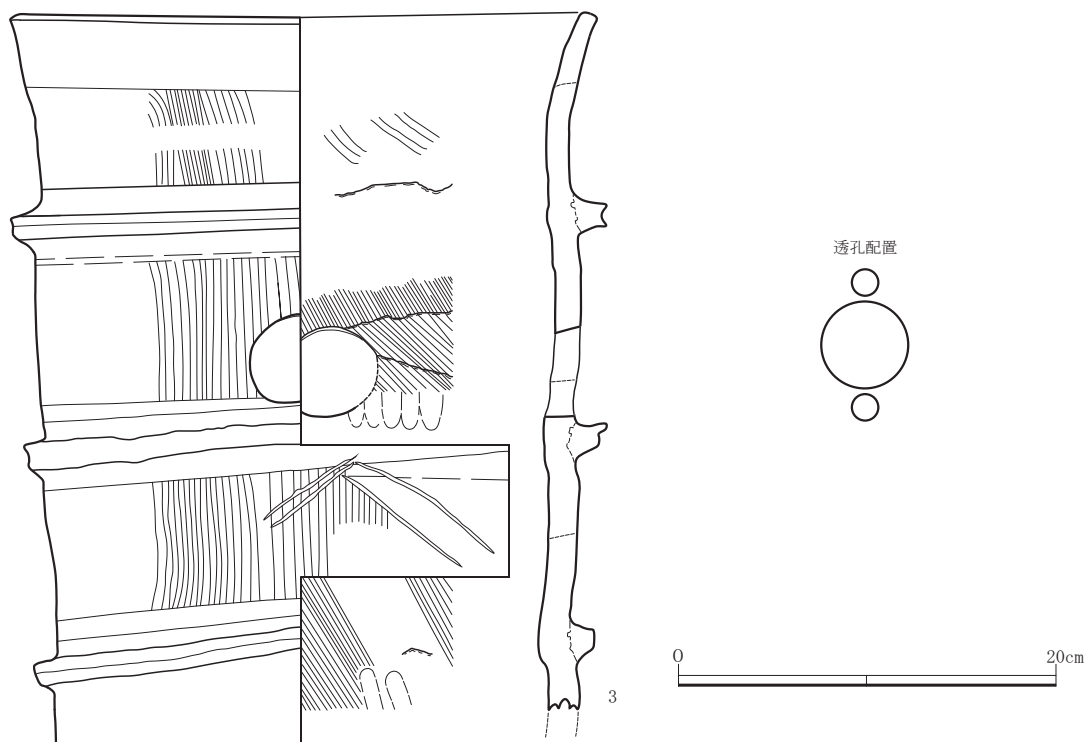


第 28 図 第一口縁部口唇部内面の接合痕（2）

本書第25図（竹中・杉井2009の図65-3）と本書第29図-1の接合状態復元図



第 29 図 松橋前田遺跡 A 地点出土朝顔形円筒埴輪実測図

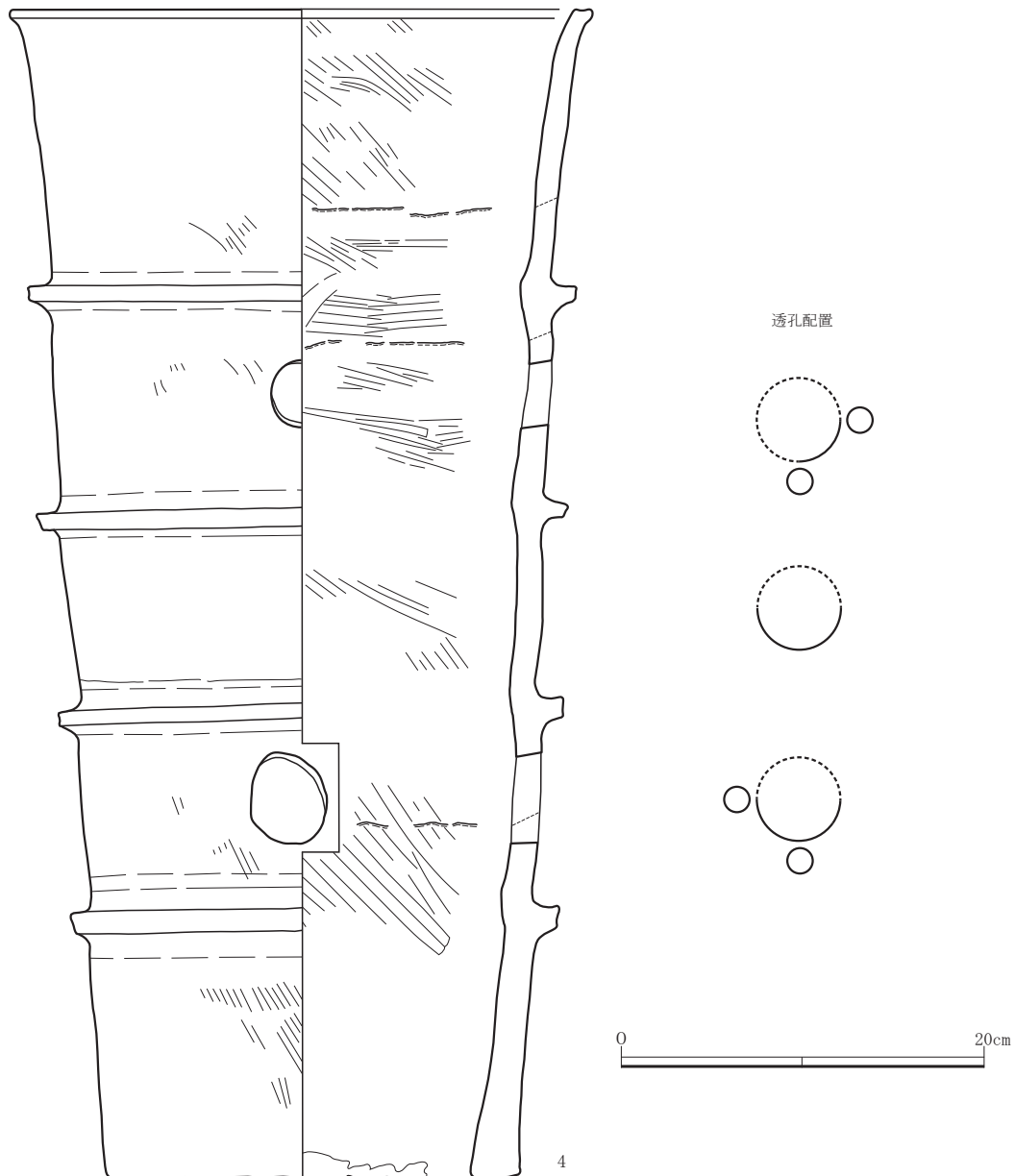


第 30 図 松橋前田遺跡A地点出土普通円筒埴輪実測図（1）

される」といった様相が普通円筒との違いとして指摘されており（2009 年報告）、これに照らし合わせると、胴部にそれぞれ 2 方向から 4 方向の三角形及び四角形の透孔をもつこの個体は朝顔形円筒の可能性が高い。各段の高さは底部 16.1cm（以下、突帯上辺を基準とした計測値）、2 段目 10.9cm、3 段目 10.7cm、4 段目 10.3cm で、胴部段の高さには整合性がある。胴部 1 段目から 3 段目にかけて外面の 4 分の 1 に薄い黒斑が確認でき、この特徴が見られるのは本遺跡から出土した埴輪のなかでも 2 の個体のみである。また、4 段目外面には「へ」の字状の線刻が施されているが、その線の一部は三角形の透孔や第 3 段突帯によって切られている。そのため、この線刻は透孔をあける際の目印として、事前に刻まれていた可能性も想定できよう。突帯は断面長方形で、極めて突出度が高い。突帯の剥落した器面には、2 条の凹線による突帯設定技法が観察できる。2 条/cm のナナメハケののち 2 条/cm のタテハケが施されている。内面は底部にユビナデが、底部より上にはナナメハケの上にユビナデ及び軽度のヨコナデが確認できる。（藤森）

## 2. 普通円筒埴輪（第 30・31 図、図版 11－3・4）

3 は口縁部及び胴部 2 段が残存している普通円筒である。底部は完全に欠損しているため、何段構成であったのか確認することはできない。ここでは残存している胴部 2 段を胴部の上段・下段と呼び分けることとする。各段の高さは口縁部段 10.2～10.9 cm、胴部の上段 10.4～10.8 cm、胴部の下段 9.6～10.5 cm である。突帯が歪んでいるため、各段の高さにはかなりの幅がある。胴部の上段には、2 方向に対向位置で円形透孔が配置される。外面から内面に向かってやや上の位置から穿孔されたようである。胴部の下段には、「へ」の字状の線刻が二重に施される。口縁端部の形状は断面台形状、突帯も突出度の高い断面台形状である。突帯の剥落した器面には、2 条の凹線による突帯設定技法が確認できる。外面調整は 2～3 条/cm のタテハケである。なお口縁部段にはタテハケの上にヨコナデ



第 31 図 松橋前田遺跡 A 地点出土普通円筒埴輪実測図 (2)

が見られる。内面調整においては、口縁部段にはナナメハケの上からヨコナデが、胴部にはナナメハケののちにユビナデが施されている。

4 は突帯 4 条 5 段構成の普通円筒である。底部 3 分の 2 周程と、胴部及び口縁部の半周ほどが残存している。全高は 64.5 cm で、各段の高さは底部段 13.8 cm、下から 2 段目 10.3 cm、3 段目 9.9 cm、4 段目 11.1 ～ 11.7 cm、口縁部段 15.3 cm である。4 段目のみ突帯の歪みにより高さが一定しないが、その他の段の高さには整合性がある。2 段目と 4 段目には、それぞれ円形透孔が配置される。外面から内面に向かってやや上の位置から穿孔されたようである。口縁端部の形状は断面台形状、突帯も突出度の高い断面台形状である。外面調整は、3 条/cm のやや目のまばらなナナメハケである。なお底部段下半、2 段目、3 段目にはナナメハケの上にヨコナデが見られる。内面調整においては、底部段にはヨコナデ、2 段目と 3 段目にはナナメハケ、4 段目にはヨコハケののちにナデ消し、口縁部段にはナナメハケののちに回転ナデが施される。(渡邊)

### 3. 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪の特徴

今回あらたに報告するのは未報告資料のうちの4個体である。はじめに2009年報告で述べられた本遺跡出土埴輪の特徴を以下にまとめる。

普通円筒と朝顔形円筒の2種が存在する。形象の出土はない。総じて器壁は厚く、底部がやや内湾するものもあるが、多くは普通円筒、朝顔形円筒ともに、底部から口縁部（ないし肩部）まで直線的に立ち上がる。突帯突出度が極めて高い。ほとんどの個体は芯まできれいに焼き上がり、窖窯焼成によるものである。外面二次調整ヨコハケは認められないが、全体のプロポーシヨンや突帯突出度、焼成状態から、古墳時代中期の中葉から後葉、川西編年Ⅳ期に比定される。

以上の特徴に加え、本遺跡出土の朝顔形円筒における透孔のあり方についても考察されている。まず透孔の形状について、円形を基調としながらも肩部や胴部の一部に三角形を配置するものが多く認められる。また透孔の配置について、朝顔形円筒に多様な配置を認め、胴部各段2方向・段違い直交配置のもの、胴部に段違いで1方向と3方向の透孔を交互に配置するもの、2段目に配置せず、3段目1方向、4段目2方向、5段目3方向、肩部4方向と透孔が増えていくものの3種に分類された。これらの特徴は、円形透孔を各段2方向で段違い直交ないし隔段直交に配置するという川西編年Ⅳ期の通例に対しやや特異である、とされた。

今回の報告に際して復元と図化を行った4個体の埴輪は、あらたに注目すべき特徴を備えている。

まず朝顔形円筒において、上述した透孔とも全く異なる透孔をもつものがある。2は、三角形及び四角形の透孔のみを配置する。そのうち四角形は2段目に一つのみで、ほかはすべて三角形である。2段目4方向、3段目2方向、4段目3方向に穿孔するが、それらは直交に配置されず、また互いに方向を違えて配置されている。これらの特徴は本遺跡の中でも特異な透孔のあり方である。このほかに今回図化しえなかったが、透孔がすべて三角形で、2によく似た朝顔形円筒を確認している。また朝顔形円筒の口縁部について、第一口縁部に第二口縁部を接着するための刻みが見られることを先述した。その第一口縁側における刻みは、単調で短い刻みを施すもの（第26図）、短いより多くの刻みを施すもの（第28図）、無造作に長い刻みを施すもの（第27図）の3種類を確認できた。これは接合技法における慣習の違いであり、製作者の別を表していると考えられる。

次に普通円筒において、口縁部段の高さ（以下口縁部高）が胴部一段分の高さ（突帯と突帯の間隔、以下胴部高）に比べて長いものがある。そこで今回、口縁部高と胴部高および底部高を計測し、本遺跡出土円筒埴輪の段構成比率を求めた。分析の対象とするのは、3・4に加え、2009年報告の普通円筒（以下、普通円筒2009とする）（第23図）の3個体である。ここでは、突帯の歪みにより各段の高さに幅があるもの、また胴部高について胴部が複数段から構成されているものは、それぞれ平均値を算出している。第12表に、3個体の口縁部高・胴部高・底部高の計測値と、胴部高を1とした場合の段構成比率を示す。4では、口縁部高の比率が胴部高に対して1.5となり、口縁部が長いことがわかる。この長い口縁部は、熊本県南部地域の埴輪によく見られる（竹田2000、竹中2003・2009、小嶋2019）。また4と普通円筒2009は共通して、底部高が胴部高に対して若干長い。この表から、普通円筒はまず口縁部高と胴部高がほぼ等しいものと、口縁部高が胴部高より長いものの2つに分類できる。また、普通円筒2009と3は、どちらも口縁部高と胴部高がほぼ等しいものであるが、普通円筒2009が底部から口縁部まで直線的に立ち上がるのに対し、3は口縁部段がやや外反するため、口縁部段のプロポーシヨンにおいてさらに区分できる。したがって、本遺跡の普通円筒は、口縁部高と胴部高がほぼ等しく口縁部が直立するもの（第32図A）、口縁部高と胴部高がほぼ等しく口縁部が

第 12 表 松橋前田遺跡 A 地点出土普通円筒埴輪計測値一覧表

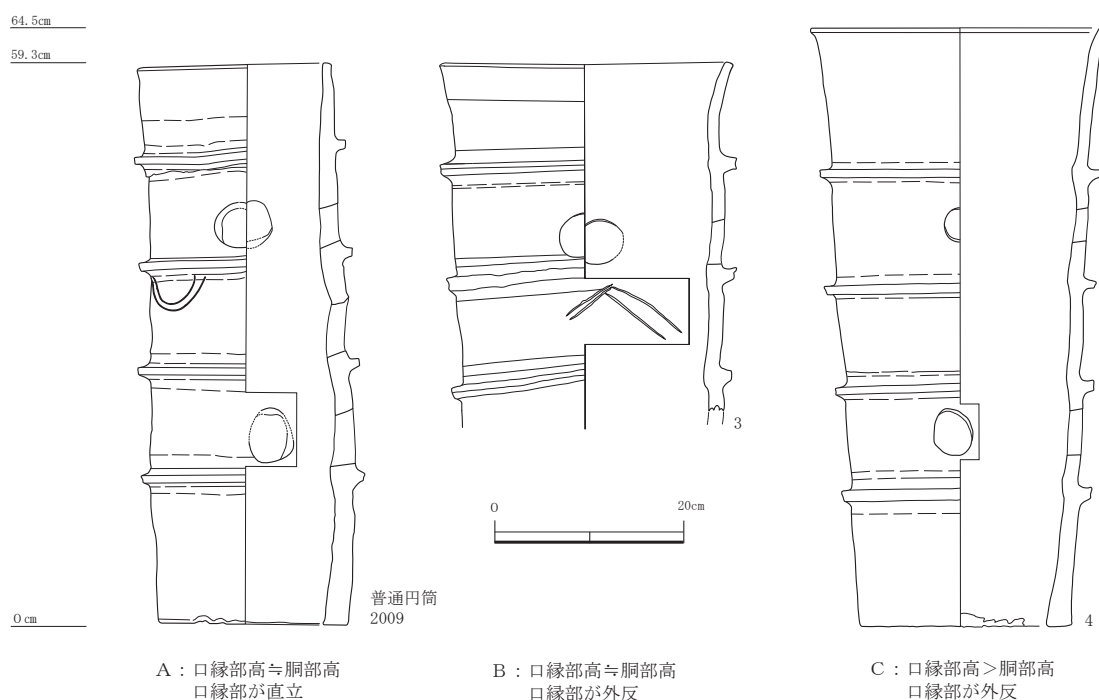
No.	全体高 (cm)	口縁部高 (cm)	胴部高 (cm)	底部高 (cm)	口縁部高：胴部高：底部高
普通円筒 2009	59.3	8.7	11.2	15.9	0.8 : 1 : 1.4
3	—	10.5	10.3	—	1 : 1 : —
4	64.5	15.3	10.5	13.6	1.5 : 1 : 1.3

※胴部高は突帯間の高さの平均値を表す

外反するもの（第 32 図 B）、口縁部高が胴部高よりも長く口縁部が外反するもの（第 32 図 C）の 3 種類に分類されると考える。このうえで、全体の器高において普通円筒 2009 や松橋大塚古墳の埴輪（第 24 図）に共通する 59.3cm 以外に 64.5cm のもの（4）が認められ、本遺跡の普通円筒は器高によっても大きく二分できるといえる。

本遺跡出土の埴輪は、近接する松橋大塚古墳の出土埴輪にきわめてよく似ている。そのため本遺跡は、松橋大塚古墳の墳丘へ樹立される直前の埴輪集積地として評価されてきた。今回の報告においてもその評価は変わらない。本遺跡の普通円筒は、突帯 4 条 5 段構成、半円状や「へ」の字状の線刻、円形透孔、口縁部段のプロポーシオンなどを特徴にもち、松橋大塚古墳の出土埴輪と高い共通性をもつ。また朝顔形円筒も、断面三角形の頸部突帯や、肩部への穿孔、三角形透孔の多用などを特徴にもち、それぞれに赤色顔料の塗布や四角形透孔といった個性をもつとはいえ、やはり同様の共通性が認められる。

2009 年に報告された 10 個体に今回報告した 4 個体を足し合わせると、これまでに報告された資料は 14 個体となる。松橋前田遺跡では 23 個体程の埴輪が出土したとされているため、いまだに 9 個体程の資料が未報告のままであると考えられる。それらのうち 2 個体は宇城市立郷土資料館に展示されていることが知られているので、熊本大学には現在 7 個体程の未報告資料が残されていることになる。今後も継続してこれらの復元・図化を行い、報告したいと考えている。また、2009 年に報告された多くの埴輪が、2016 年の熊本地震により破損してしまった。未報告資料の整理作業と並行して、これらの修復と保存を行っていくことも今後の課題である。（山田）



第 32 図 松橋前田遺跡 A 地点出土普通円筒埴輪の比較

## 引用・参考文献

- 神川めぐみ編 2015『松橋大塚古墳』宇城市文化財調査報告 第5集 宇城市教育委員会
- 神川めぐみ 2019「宇城市大塚台地遺跡発掘調査ならびに被災文化財復旧の成果」『平成28年度熊本地震復興に係わる文化財・埋蔵文化財調査の成果報告会』日本考古学協会 pp.12-21
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 pp.1-70
- 小嶋 篤 2019「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』第9号 埴輪検討会 pp.69-88
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』 pp.131-184
- 竹田宏司 2000「熊本県の埴輪」『九州の埴輪その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会資料集 九州前方後円墳研究会 pp.437-442
- 竹中克繁 2003「円筒埴輪の地域性—熊本県地域の埴輪—」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 pp.85-100
- 竹中克繁 2009「窖窯焼成円筒埴輪生産の地域的様相—八代海沿岸地域の事例—」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 熊本大学文学部 pp.171-182
- 竹中克繁・杉井 健 2009「松橋前田遺跡A地点出土埴輪の整理報告」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 熊本大学文学部 pp.85-108
- 三辻利一・辻本良介・高木恭二・中原幹彦 1999「熊本県内の古墳、窯跡出土須恵器と埴輪の蛍光X線分析」『塚原平古墳』塚原平古墳発掘調査団 pp.64-95
- 宮崎敬土編 2015『松橋大塚古墳』宇城市文化財調査報告 第4集 宇城市教育委員会

## 挿図出典

- 第22図 竹中・杉井 2009
- 第23図 竹中・杉井 2009
- 第24図 宮崎編 2015
- 第28図 竹中・杉井 2009